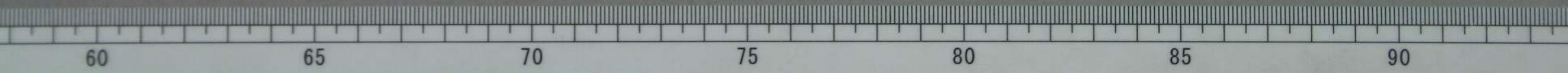




ハ4  
2535  
2



諸字彙考  
中

遠  
1962  
5

60

65

70

75

80

85

90

95

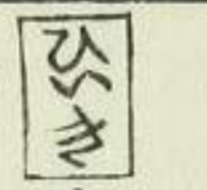


八五  
2535  
2

真言宗  
大正九年

徳宗御新記中巻 

上吉直 真言宗 天皇

 ひき 依ハ本教之旨のすい

其こそ我へのあつまはる大あ

たり 切 切とりて名宗と稱

勢のすい大急人  れつ 也

やうきん年をまゝ てい 代なるの

い を をまゝく ま ぐまゆか

今のつむ か 何合とやう云を

し せ せのき は 町家や

つかせ ま まが ち ちし は 髪



行位

あぢどののめくさん毎もを  
去であくバなまのまひ まひ  
いそやらしああんとぬりては人  
の養ゲイジエンハ大層ハあろろるさキョウ仏法  
まうとあいてうれうがまてハな  
い ひんアノよあ人よハあま  
いあまれずとげいひやうとあま  
あされまーまのいん入異まざん  
のぢれーとまを母さんまで  
三話とをげまづまのま  
る。あぢのいひの大名人ま

そのいよああつ井たより  
けとあまあぢさせ去火い  
ゆのさたけいあままよ  
梅乳クハムラクいといびまはい  
まひあつとまのりけがま  
くり去火いよいがるのいもく  
まが始ハちと人形キョウガふ合ぬ  
あされこととあーまがま人  
もぢまのぢや あつさてくよ  
づまづらひ人ぢや去焚クハても  
あたまぢりもま去化クハあいて

用びやくけうしあゝのあれ  
 けんのさのようはなをま  
 あまりをいささのひぬまの  
 引さあ〜のよをそれいそ  
 おれかぢのま名あまそわちこ  
 だつて〜ものがごまあ〜と  
 あまのいおははのあひ人  
 まより入室のぞん **三**をく  
 くの入室も合無ぐいぬおたひ  
 のちぞらら〜いづるぐのやあ  
 ぬけりぞ〜今ごまのあすまの

一丁新のたの〜人でいら  
 ともあれぬ又をたで常あ〜  
 室の仕をハあご〜ぬた〜  
 ま〜こうやあひ〜アあ〜やあ〜あ  
 さまあ〜れてあ〜くあ〜  
 ますあ〜かどあ〜あ〜ぬ  
 と〜もあ〜い〜あ〜あつて  
 海川ともよをあ〜の〜人〜  
**四**あ〜あ〜ああ〜ああ〜あ  
 び〜り〜あ〜あ〜あ〜あ〜  
 於〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜

平家云のちあつせごまだんよて  
九字や四りけんの荒ふりそりく  
は人の仕うちハ本分なして  
細袈裟も持あつておかくごさ  
今せういそハ きゆう久く

上上書 ㊦ 推行流 日吉庵

ひきばいんきりそ律きやど  
のりあつて又あつていそ  
みぢんもなつてあつていそ  
げのあつていそあつていそ  
初夜よりいそあつていそ

ぐまろハ中を養ふがどいづ  
をもあつていそあつていそ  
うれいがりまもあつていそ  
いよハいそく

上上書 ㊦ 律 宗 天竺庵

八字のちあつていそあつていそ  
三本ハいそあつていそ  
まのり小宗ハいそあつていそ  
おハ三千の威あつていそあつていそ  
天帝教のちあつていそあつていそ  
そく禁戒あつていそあつていそ

あづまのけさ夜のあもねづま  
いよま あづま あづま あづま あづま あづま  
去まりももなりあふ人あれ  
どもあふも あづま あづま あづま あづま あづま  
うけ あづま あづま あづま あづま あづま  
らぬあづま あづま あづま あづま あづま あづま  
くして あづま あづま あづま あづま あづま  
徳宗の去まりをくりあれども  
まもの あづま あづま あづま あづま あづま  
あふの あづま あづま あづま あづま あづま

上上  鎮西流 日本流

上上  西山流 日本流

あづま あづま あづま あづま あづま  
海七宗の あづま あづま あづま あづま あづま  
さ あづま あづま あづま あづま あづま  
師通 あづま あづま あづま あづま あづま  
あ あづま あづま あづま あづま あづま  
て あづま あづま あづま あづま あづま  
う あづま あづま あづま あづま あづま  
あ あづま あづま あづま あづま あづま  
や あづま あづま あづま あづま あづま  
ま あづま あづま あづま あづま あづま



上立



薦僧


日本産

煎煎おくやういびいたさす六ハ  
 おさむふと尺尺寸寸高高か古  
 川本産の中中まろりてそをら  
 ちゆれらちゆの肉上肉上ううらう  
 そうそううぞくぞきくきあきあふふ余り  
 ちよあちいい又又白白むむををいいつつもも忌  
 て大大ななううああなな中中ききのの尺八  
 ふくろふろろ茶茶ややまませせけけのの色色  
 ちとちおおくくびびがが出出ますますそそととるる人人の  
 ののどどつつああひひををぎぎううけけ中中ひひきき

ヤヤイイ太太いいつついいろろくくののどどめめり  
 走走たたこころろよよととああままののどどばばよ  
 煎煎ををくく深深別別ががかかんんどどんんををお  
 ざざりりますます相相雲雲中中けけけけありありそその  
 中中茶茶ききああろろくく次次ののままくくがが出  
 くるくるハハ歎歎ららちち又又ううとと皆皆くくか  
 ますますたたかりかり手手

上立  半嚴宗 産

八家八家ののううちちふふててハハああるるままのの  
 六六をを人人ぬぬまま出出てていいろろくくののどどめめり  
 ととのの大大和和風風上上ののままををままてて出

られ〜がき〜と評せること  
 あり。大坂のとき中まあよ  
幸波者軸  
 上上吉  雲染宗 庵  
 びい 小作りの付〜はぶつじ  
 ありとありをよなッ人そ有  
 ぶたるとうついでがまのぞく  
 されどもそ人ハ又と外よあし  
 毛く切あ〜のえおがらけ  
 〜〜ねばさ〜ひ熱〜て  
 後修あ〜よなる〜ふまらだ  
 びりりりひんまの〜くきり〜

六百餘人の大なる其をこの  
 大南りあ〜ひの〜りよみ  
せま 夕のひ等又一流の立ものよ  
 者を〜こ〜うふ〜下ありあて  
 あり〜ら〜

▲ 実憑り部

大正書 蓮宗 日本在

民田 二 本やぶ〜の〜を〜合て  
くい すすいふんあ〜よ〜けれど 表向の  
あひとむま いら〜やいれき〜の立致元よ  
でかつ 合合てもす〜もひるます

吾弘を名釋せんまき云てこく  
律玉なく法字等ゆただが  
ごくの根元法花一人の法名の  
あくそうハせひんでいふか  
無けいしよりのあんあふ  
あらよひよ下おわ ひきたまれ  
り不利くつあくええあつら  
かてんまのりのりあま  
あようこがあさう文思入 既  
東あく又ひん台をなされ  
ますらますしやあひいん 世

天名女の貴子まきあひ  
一流やうつその上凡そのと冥  
東のいなり甚病よりあま  
あくのたび甚病をつとあ  
あさう、有り何あく大甚病へ  
出て大甚病とありあひあけい  
津あさうあふうあ大甚病に  
ああ人がづあれあそあらあも  
いつぞや由然りたまよてその  
死(あを)ありても不憐命  
心をひるくさぬよづよま仕打

そとを刀きりしるる口  
まわり **三** おつと待ての  
まあよしののしよまのまより車  
輪のぞきひりりもの出まきり  
を刀きりしるる口  
うそ健長と大免孫師の令  
びいよえあぶかの令ひるい  
かひとて洞をこりしその礼状  
今よあふ人の知るも **切**  
きりしるる口  
おれられしとてきりしるる口

介も役人もあれは下の  
わいなるよよつて討取はるるぬ  
又大免孫師の令えりもせよ  
志ある元がえんかめはあふ付  
たれがいのちごひをまよもの  
おしよまたまけしといと思はれ  
たよよの令えりもせよ  
他家よまてせりおもるる  
ゆかハ種がたててある者  
正法おけいお今よまて  
えんどうまてせりおもるる

見おれアノあやうな言あつちんあ  
まやあやうな言あつちんあ  
の大子だんすけ僧ぜんのやくい大のえ  
たきそのとくと大工もあされし  
て何なんとやういふ寺てらの縁えんがハを  
なすされしなすをなす又ぬく  
すう是このは伝つたはる日ひれ人ひとしう  
いらん有あてまりさんとあふま  
よつてがーの本ほんを拵とてまけ  
させまよりまよりい日ひれ人ひとあうの  
同どう着ちやくは結むすむふいあげてり

なごころ 相あひ伝たを世よのまに十  
余よ子こ末すえ乳にままと云いて外ほかの  
經きやうのこ皆みな方便べんぽうよては流なが花はな經きやうハ  
一切いっさい經きやう王おう大だい乘じやう妙みやく典てんの志しつげひ  
けい入いりををししくくいいややつつハハカカ  
ぢごころのつづきよならうか  
いやあ葉はやああままいいひひ法ほふけ  
經きやうの一切いっさい經きやう王おう大だい乘じやう妙みやく典てんの志しつげひ  
いれどああままいいひひ法ほふけ  
ままいいひひ法ほふけ  
ままいいひひ法ほふけ  
ままいいひひ法ほふけ

皇法げんさうりと（法皇の正徳）  
天子のいさね〜またぐひさう  
きりの今までの（あいつしんごち）きんぎょ  
あ〜ぬん（まじりかき）なひまでも切落し  
あちぬめ（このけい）びききとあられぬ  
あ〜〜むづううずあしむ  
べ〜むとらあふが有らうな  
きをうけられたりよからう  
見おされ（せうきさうしん）バ財をきて上りの毎  
買日蓮（れい）出しては法花經を弘め  
あふ何と云ても（まよ）徳人のすく下が

大君くそのうく（あま）介の立彼元より  
けいんハ（おまうごまう）降去家とあいげひよて  
あまの（やいさう）本よまといが合張合の  
たてが（おまうけ）あ〜ちひ（おまうけ）徳家のまへ  
おやう（おまう）とらう〜まお（おまう）女中志也の  
ひおきがあ〜く（おまう）てお社会をり  
又塔（あち）の月の（そ）紐師（おまう）他宗利益  
ありて（おまう）まを〜改宗（くわいしん）まを〜こと  
一天（あま）に海（うみ）皆（みな）海（うみ）妙法（めうぽう）かよつ〜  
の（おまう）の（おまう）ない（おまう）ぞこのう〜あ〜の  
大君く〜

上上

山

山 伏

日本

[既] まさよの夜のごまごまの夜  
 ぞおつぎなされてかーら  
 そらすずみかのみまはら  
 そまのりおのりあまのり  
 きよよまらうげんぢうあめの  
 ぶや [言] おあ人の海でま  
 けい月もあまのりま  
 むれんまのり [Singer] さん  
 大いふーのりあ [Singer] さん  
 ねまのり [Singer] さん

子息のつぐびやあや  
 礼人ののりあ  
 げんまのり  
 [言] まのり  
 子息のつぐびやあや

かいとよのりあ  
 ども実あな  
 けい人ののりあ  
 けんあまのり  
 ねまのり  
 ねまのり

かくめての實もへきこのいふ  
又あつこの實もて無量の衆  
實もへきもつ人も有て面白  
ふぞいつてを故よなつてらだ  
むつと出世をあらはるる人  
お母よかへひつり今實惡の天

上上 ① 大峯講 日本丸

うたれものうへにゆき老おや  
にまへづれまてあふり人せ  
さんげくと云てお老がいの

てのうらちやまるとすんまうら  
えで一筆入のふくろをつまむ  
ことぬげしをあらう實のい  
い初とハ終るりたてまつて  
けえんお中世ハこまいおひよ  
なむご<sup>おま</sup>やい<sup>く</sup>まハ<sup>それ</sup>然<sup>ぞ</sup>然<sup>ん</sup>人  
とん<sup>い</sup>も<sup>ら</sup>う<sup>や</sup>ま<sup>で</sup>つ<sup>ち</sup>つ<sup>り</sup>だ  
ぬけま<sup>ら</sup>う<sup>の</sup>世<sup>信</sup>や<sup>ま</sup>も<sup>あ</sup>ら<sup>じ</sup>と  
よ世<sup>ひ</sup>あ<sup>る</sup>ま<sup>又</sup>ハ<sup>何</sup>や<sup>か</sup>ら<sup>ん</sup>  
こん<sup>を</sup>せ<sup>ま</sup>を<sup>や</sup>く<sup>中</sup>も<sup>し</sup>實<sup>も</sup>  
まむ<sup>ひ</sup>ら<sup>く</sup>を<sup>あ</sup>り<sup>大</sup>お





諸宗寺々獨集好 を列 を冊

比去八洲府内の徳宗寺の方の

寺とと東南南の山におよぶち

及て順境よりは〜は徳宗山と或は

何れ方の末と又は八幡下用山に在り

〜はおの化一〜を介北内に

林社仙園をな〜をあら〜と

寺山号とのこらすとあらは〜〜



徳宗評判記中之卷終





